

〈特集〉東南アジアにおけるイスラーム

序

小 杉 泰*

近年、東南アジアに関して、社会的にも研究的にも、イスラームについての関心が高まっている。その理由はさまざまであるが、世界的に観察されるイスラーム復興が東南アジアでも顕在化してきたことも、大きな要因であろう。マレーシアなどにおいては80年代から、いわゆるダクワ運動の展開のみならず、マハティール政権のイスラーム的正統性を強調する言説やイスラーム運動をメインストリームに取り込む政策によって、イスラームの重要性が指摘されてきたが、それまでイスラーム復興の傾向が比較的希薄とされていたインドネシアにおいても、1998年の政治変動を契機にさまざまなイスラーム的潮流が表舞台に現れるようになり、これまでになく、その重要性が認識されるようになった。

イスラーム世界における東南アジアの重要性は、あらためて力説するまでもない。インドネシアが世界最大のムスリム人口を擁する国であることは言うまでもなく、「先進国の仲間入りをする最初のイスラーム国」をめざしてきたマレーシアも、これまで大きな注目を集めてきた。さらに、イスラームが多数派を形成する両国のみならず、フィリピンや、タイ、ミャンマーなどにおいても、マイノリティーとしてイスラーム人口がそれなりに大きな意味を持っている。

しかし、過去30年余にわたって大きく発展を遂げてきた東南アジア研究の中において、イスラーム的諸側面の研究は、意外と新しい分野である。おそらくその原因は、東南アジアの中において、国民統合や経済発展の問題、あるいはベトナム戦争を初めとする冷戦や国際関係の諸問題などと比べて、イスラームにかかわる諸問題が緊急の課題と思われなかったことと、世界各地を対象とするイスラーム研究の中において、東南アジアの事例が必ずしも関心と呼ばなかったことに求められるであろう。

いずれにせよ、80年代以降、東南アジアのイスラームをめぐる社会、政治、経済の諸側面について、研究上の関心が高まり、国際的に見てもさまざまな研究がなされるようになってきた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科; 46 Shimoadachi-cho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan

今回、「東南アジアにおけるイスラーム」を特集したのは、そのような研究状況について俯瞰するとともに、さらなる発展をめざして現状を把握し今後の展望を開きたいと願ったからである。もちろん、この大きなテーマについて、1回の特集ですべてをカバーできるわけもなく、過大な主張をすることはできないが、特集テーマ自体が新しい問題意識の生成を示すものとして、今後の研究の発展への一里塚をめざしたいと考えるものである。

以上に述べた公的な企画の意図とは別に、少し個人的なことを付け加えることをお許しいただきたい。この特集号の編者は、周知のように、イスラーム学を専門とするとともに、中東、特に東方アラブ諸国を対象として地域研究を行ってきた。そのような編者が、『東南アジア研究』において特集号を担当し、自分も一つの論文を掲載するにあたっては、多少の説明と弁解が必要であるように思われる。

編者は、1998年4月に、京都大学の中では東南アジア研究センターと「両輪」のごとき関係となる、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（略称「AA研究科」）に着任したが、その際にごく短期間とはいえ東南アジア研究センター教授となり、その後も「両輪」の協力関係に基づいて『東南アジア研究』の編集委員を務めてきた。その過程で、東南アジア・イスラームの企画が生まれたわけである。背景には、東南アジアの門外漢として、編者が多少なりとも貢献できる分野があるとすればイスラームであろう、ということがあるが、それだけでは組織と人事のコンテクストであって、学問的には説明にも弁解にもならない。

編者自身の東南アジア・イスラームへの関心は、20余年前にさかのぼる。当時エジプトに留学していた私は、イスラーム世界各地からカイロに集まっている留学生の数と出身国の多様さに大いに驚いた。留学生が学ぶ対象は、自然科学から文学に至るまでさまざまであり、イスラームとは必ずしも関係がなかったが、これらの留学生の招聘は、50年代からの「アジア・アフリカ連帯」の一環としてエジプト政府が推進していたものであった。東南アジアからはマレーシア、インドネシア、南フィリピン、タイの学生が特に目についたが、それは「イスラーム世界」のネットワークを感じさせるに十分のものであった。

イスラーム世界の広がり、日本と近い東南アジアでの実態に興味を持った私は、早速最初の機会をつかまえて現地を訪れることにした。70年代の終わり頃である。フィリピンでは、南部のサンボワンガ、コタバトを回り、マニラではフィリピンのムスリム史の権威とされていたマフル博士を訪問した。タイではバンコクのムスリム・コミュニティを瞥見したあと、鉄道でマレーシアへ向かった。クアラルンプールでは、真新しいマスジド・ネガラと伝統的なインディアン・モスクの対照性に感心したことを思い出す。この旅では、地域ごとの違いもさることながら、イスラーム世界としてのある種の共通性の方が印象に残った。

まもなく、1979年にはイラン・イスラーム革命が起こり、次第にイスラーム復興が各地で共振現象として観察されるようになり、イデオロギー的な共鳴性について論じられることが多く

なるが、私が最初の東南アジアでの旅で感じたのは、もう少し日常的なレベルでの通底性のよ
うなものであった。それ以来、イスラーム世界の東西において、訪問したいわゆるイスラーム
国が合計 20 余、マイノリティーとしてムスリムが住む国が 10 ばかりであるが、多様性ととも
に感じられる共通性なり通底性の感覚は、強まりこそすれ決して弱まることはなかった。もち
ろん、私がこれまでに訪れることができたイスラーム地域は全体のごく一部であり、多少なり
ともフィールドワークと呼べることを行ったのはきわめて限られているから、過度の一般化は
危険であるが、四半世紀の経験を通じた認識は自分なりの確信となっている。

しかし、私自身がフィールドとしているマシュリク（東アラブ地域）の中でも、イスラーム
もムスリムの生活も多様である。同じ農民と言っても、エジプトのナイル渓谷のスナ派、南
レバノンのシーア派、イエメンの山岳地帯のザイド派では、おのずと世界観も違っている。し
かし、それでも共有されるある種の特徴を持っている。それは、アラブ性に由来するのか、イ
スラームなのか。東南アジアのような、非アラブのイスラーム諸国とも通底するならば、それ
はイスラームということになる。はたして、そうなのであろうか。

中東と東南アジアの間で学問的な地域間比較を行う機会は、1993 年に訪れた。その年、東南
アジア研究センターで組織された文部省科学研究費重点領域研究の「総合的地域研究の手法確
立」では、グループの一つとして「中東地域研究」が編成され、私もそこに参加することになっ
たからである。2 年間の間には、さまざまな討論の機会があったが、その一端は『「地域間研究」
の試み——世界の中で地域をとらえる（上）』[高谷 1999] に収録されている。当時私は、イ
スラーム化とアラブ化の位相の違いを軸とする「中東地域」論を展開したが、それはあくまで
中東を説明する原理であって、イスラーム世界全体を展望するものではなかった。しかし、そ
こから「イスラーム化＝現地化」論へと議論が展開したのであり、今回の特集に収録した拙稿
は、やや遅めの提出であるにしても、「総合的地域研究の手法確立」での成果の一つと言えるで
あろう。

1998 年に創設された京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は、東南アジア地域研
究とアフリカ地域研究の 2 専攻から成るが、両者の間に位置するものとして、連環地域論講座
が置かれている。実体的には、南アジア、西アジアの地域研究を行うのであるが、研究領域と
してはヒンドゥー世界論、イスラーム世界論となっており、ここに「イスラーム世界」なるも
のを学問領域として論じる日本で最初の講座が成立することになった。このようにして、イス
ラームを軸とする地域間比較のインフラが整ってきたことになる。

イスラーム世界を広く、かつ動態的に眺望する必要性が感じられるようになったのは、明ら
かに 70 年代後半からのイスラーム復興に多くを負っている。私がかつて編集した『イスラーム
に何がおきているか——現代世界とイスラーム復興』[1996] では、中東のみならず、中央ア
ジア、東南アジア、ヨーロッパまでを視野に入れている。また、『イスラーム世界』[小杉 1998]

では、イスラーム復興の結果、イスラーム世界が意味ある有機体として国際関係の中に登場してきたとのモチーフの下に、東南アジアをも含めたイスラーム世界を描くよう試みた。

このような関心から、私は、中東をもってイスラームを語ることに反対し、また中東的なものを「本物」のイスラームであり、東南アジアなどはマージナルなイスラームであるとする立場に強い違和感を持ってきた。中東を専門とする研究者としてはやや異例の主張かもしれないが、上に述べたようなそれなりの実地的な体験に基づいた認識として、自分なりの確信は持ってきたつもりである。とはいえ、印象論的な主張に陥ることなくこのような議論を進めるためには、事例研究に基づいた実証的な検証が必要とされる。そのためには、地域間比較を行うこと、そのための参照枠組みを作るよう努めること、各地域での事例研究を集積することなどが必要とされる。

中東研究者が東南アジア研究に参入し、東南アジア研究者が中東研究に参入することが、望まれるのである。しかし、地域を専門とすればするほど、自分の地域ではないものに対して「門外漢」のスタンスを取らざるをえないのが、地域研究者の宿命であろう。ブレイクスルーをめざすためには、この点において少しの蛮勇をともなった——場合によっては、いささかの不作法をともなった——越境が必要であるように思われる。

私が、本特集の编者として、蛮勇を奮い立ったのは以上のような考慮の上であり、研究者諸賢にはその不作法をご寛恕いただきたい次第である。

収録した諸論文の背景について、2, 3 申し上げたい。小杉泰「イスラーム世界の東西——地域間比較のための方法論的試論」は、かつて行われた研究プロジェクト「総合的地域研究の手法確立」での議論を踏まえながら、イスラーム世界の多様性と統一性をいかに理解すべきか、方法論的な提起を行うものである。理論上は、いかなるイスラーム地域にも適用可能なはずの議論であるが、視点としては、中東研究・イスラーム学から東南アジア・イスラーム研究への提起となっている。また、そこではイスラームを中東中心に考える見方を批判的に考察した。

マーティン・ブライネッセン氏は、国際的に著名な研究者であるが、東南アジアと中東（特に、インドネシアとクルド人地域）の両方を研究対象とする点でユニークな存在となっている。ここに収録した論文は、昨年東南アジア研究センターで行われた研究会の報告をもとにしたものであるが、両地域を比較してみることでできる力量を遺憾なく発揮して、インドネシア・イスラームを論じている。特定地域に根ざしたイスラームについて、その中のグローバルな要素とローカルな要素をどのように考えるべきかという根源的な問題に向き合っており、研究上のパースペクティブの点でも示唆に富んだ論考であろう。

続く3論文は、もともと、文部省科学研究費による創成的基礎研究「イスラーム地域研究」研究プロジェクトの一環として行われた研究会での報告を発展させていただいたものである。

このプロジェクトは正式には「現代イスラーム世界の動態的研究——イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」と題するもので、1997年度から5年の予定で開始された。私自身を含めて、百人以上のイスラーム諸地域を研究対象とする研究者が参加している。かつて80年代後半に重点領域研究「イスラームの都市性」が行われたが、その特徴が、西洋史、中国史の多くの研究者の参加を得たことであったとすると、今回の「イスラーム地域研究」は東南アジアや中央アジアなどの地域研究との連携が新しい特徴となっている。東南アジアのイスラームについて、研究状況を回顧し、今後の展望を検討しようとの研究会はその趣旨に沿って組織されたが、その結果として執筆された3論文は、論文の形式としては、研究動向、書評論文的な要素も含んでおり、やや特殊と言えるかもしれない。

内容的には、小林寧子氏のインドネシア、川島緑氏の南部フィリピン、オマール・ファールーク氏のタイを扱ったそれぞれの論文は、これまでの研究史を十分に踏まえるとともに、今後のあるべき研究について意欲的かつ具体的な提起を含んだ力作であろう。俎上に挙げられた先達たちの貢献をどのように評価すべきかは、個々の研究者によって異なる立場があるであろうが、編者としては、今後の議論を深めるためにも執筆者の見解を強く打ち出していただきたいをお願いした。無理を承知のお願いに対して、力のこもった論文をいただき、特集担当者としては大変ありがたい。私自身は、東南アジア研究の先行研究を正確に評価する能力を持たないが、各論文で論じられているようにきちんとした評価を行い、またそれについて議論を交わしていくことが研究を発展させる王道であることは、おおかたの同意を得ることであろうと思う。これを一つの出発点として、ご議論いただくことができれば、本特集としては本望である。なお、このような形で東南アジアを扱う以上、マレーシアを省くことはできないのであるが、今回は事情があって同時に収録することができなかったのは残念である。

そのかわりというわけではないが、マレーシアのイスラームをめぐる事例研究を2本収録することができた。シュクリー・サーリフ氏の論文は、マレーシアのイスラーム化の事例を扱ったもので、全マレーシア・イスラーム党（PAS）支配下のケランタン州を事例としている。ここでは、州政府がイスラーム国家の実現に向かって行っている営為が、従来しばしば論じられてきた中央政府との摩擦の視点からではなく、現代における「イスラーム国家」という命題に沿って、いわば内的な文脈から描き出されている。言うまでもなく、現代国家がイスラーム的論理によって構成されるか、あるいはその運営をイスラームによって律することが可能かという問題は、イラン革命以降、イスラーム世界での政治論の一つの焦点となっている。しかし、これまでのイスラーム政治論は中東での事例が中心的であり、州レベルとは言え、ケランタンなどの実態が知られることは非常に有益と思われる。

シュクリー氏の論文が、イスラーム化をめぐる中心的な課題の一つを扱っているのに対して、信田敏宏氏はマレーシアの「先住民」であるオラン・アスリのイスラーム化という、これ

まで扱われてこなかった新しい問題を対象としている。やや長めの論文であるが、意義深い論文であるので、本特集に収録することとなった。信田氏は若手の人類学研究者であるが、このような新しい課題に対して意欲的に取り組んでいる姿勢を、高く評価したい。

前述したように、筆者が「東南アジアにおけるイスラーム」特集号の編者となる変則状況は、やや個人的かつ組織的な事情に多くをよっている。いささか僭越とは思いますが、その一方で、「餅屋」風に地域毎の壁を維持するのではなく、おおらかな雰囲気地域間交流をしたいと願う。その意味で、今回の試みは、東南アジア研究者をはじめとして中東以外のイスラーム諸地域を対象としている諸賢に、中東のイスラームについても大いにご発言をいただきたい、またイスラーム研究そのものにもどんどんご参入いただきたい、とのお誘いを含意している。

東南アジアのイスラームが、他地域のイスラームとともに、いっそう、ポジティブな立場からの論議の対象となっていくことを願っている次第である。

参 照 文 献

小杉 泰. 1998. 『イスラーム世界』筑摩書房.

_____ (編). 1996. 『イスラームに何がおきているか——現代世界とイスラーム復興』平凡社.

高谷好一(編). 1999. 『「地域間研究」の試み——世界の中で地域をとらえる(上)』京都大学学術出版会.

Islam in Southeast Asia

Introduction

KOSUGI Yasushi*

The phenomena of the Islamic revival, or Islamic resurgence, has been observed in various parts of the Islamic world in recent decades. Southeast Asia is no exception. If these phenomena have encouraged specialists and general readers alike to have an active interest in Islam, and in the Islamic world with its various components, this is certainly fortunate for those wishing to learn more about these areas. However, Islam, as understood and practiced in various parts of the Islamic world, certainly deserves more attention than these recent phenomena may suggest. It would therefore be appropriate, given the renewed interest in Islam, in the Islamic world in general and in Southeast Asia in particular, to review and make assessments of the state of affairs in the study of Islam and Islamic society, so that further study may develop by strengthening the merits and overcoming the shortcomings of what we have so far accomplished.

The Center for Southeast Asian Studies (CSEAS) at Kyoto University has, in the course of its research activities on Southeast Asia, shed light on certain aspects of Islam in Southeast Asia. The Center has been pioneering “global area studies” and “inter-area comparative studies,” among other things, in order to establish methodological foundations for Area Studies. In the course of its research activities, the Center has been cooperating with researchers from various areas of the world, both from within and from outside Japan, and including specialists on the Middle East and on other Islamic areas. In 1998, with the strong support of the Center, the Graduate School of Asian and African Area Studies (ASAFAS) was established in Kyoto University as a sister institution to the Center. Both the Center and the Graduate School are institutionally linked and cooperate in research activities as well as in fostering a new generation of area specialists. The Graduate School has, among its departments, the Department of South and West Asian Studies, which contains the program for the Study of the Islamic World. It wouldn't be unfair to say that a new base for the study of Islam and Islamic Society has been laid out in Kyoto University. It is at this junction that this special issue on Islam in Southeast

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, 46 Shimoadachi-cho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan

Asia is situated.

Between its covers, this issue contains three sets of articles. The first set, namely the articles “Reconsidering ‘Unity and Diversity’ in the Islamic World: A Methodological Inquiry” by Kosugi Yasushi and “Global and Local in Indonesian Islam” by Martin van Bruinessen, deal with methodologies and perspectives relating to the approach of Islam and to its related topics in Southeast Asia. The second set, namely “In Search of a Truer Image of Islam in Indonesia,” by Kobayashi Yasuko, “The Philippine Muslim Studies” by Kawashima Midori, and “The Muslims in Thailand: A Review,” by Omar Farouk Bajunid, review the history and present state of studies on Islam in these three countries/areas and suggest how to develop them in a proper manner, proposing particular fields to be strengthened. The third set includes two case studies on Malaysia, namely, “Establishing an Islamic State: Ideals and Realities in the State of Kelantan, Malaysia,” by Muhammad Syukri Salleh and “Conversion and Resistance: An Examination of Islamization among the Orang Asli in Malaysia,” by Nobuta Toshihiro. A book review on Islam in Southeast Asia is also added.

The editor of the issue is very grateful to all contributors and hopes that this issue may stimulate further discussions on the topics proposed in its articles, as well as on the greater issue of Islam in Southeast Asia. Comments and suggestions from the reader will always be greatly appreciated.